

## 2021年度におけるスチューデント・インターンシップ活動報告

北川 浩子

## 要 旨

城西大学では2020年度からスチューデント・インターンシップを教職課程の「大学が独自に開講する科目」として全学で開講する科目にした。その年は新型コロナウイルス感染症により開講が断念されたが、2021年度後期に経済学部3名、経営学部4名、理学部 化学科10名、理学部 数学科25名の計43名が坂戸市内の7つの小学校と5つの中学校にインターンシップ生として配置された。それによって、ポストコロナにおける学校経営の進め方を学習し、現場におけるICT教育の方法やそれによる生徒児童の対応等に触れることができた。学生自身が通っていたコロナ以前の状況とは異なる学校現場を体験できたことは教育実習前教育として大変有意義な経験となった。

キーワード：学校インターンシップ、教員養成、資質向上、アクティブラーニング

## 1. はじめに

2015年に「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」の中央教育審議会の答申<sup>(1)</sup>（平成27年12月21日）が出された。そこにおいて「学校インターンシップや学校ボランティアなどの取組みは学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である。また、学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握するための機会としても有意義であると考え。」と提言されている。また、学校インターンシップの実施については既存の教育実習との間で役割分担の明確化を図るとともに、その円滑かつ確実な実施に向けて、受入れ校の確保や実施内容の検討等のための教育委員会や学校と大学との連携体制の構築、大

学による学生に対する事前及び事後の指導の適切な実施、学生側と受入れ校側のニーズやメリットを把握するための情報提供の実施など、環境整備について十分に検討することが必要であることから、教職課程での位置付けは各大学の判断により委ねられた。それにより、今日では学校ボランティアや学校インターンシップへの取組みが多くの教員養成大学で様々な形態で行われている。

城西大学では平成18年（2006年）に坂戸市との間で「坂戸市スチューデント・インターンシップ事業に関する協定書」が締結された。これによって2007年度に理学部数学科及び化学科の2年生科目としてスチューデント・インターンシップⅠ（前期）、Ⅱ（後期）が、理学部数学科の3年生科目としてスチューデント・インターンシップⅢ（前期）、Ⅳ（後期）が開講され、数学科28名、化学科13名が第1期のスチューデント・インターンシップ生として各小・中学校に配置された。さらに2008年度からは経営学部でも開講され、2学部3学科から毎年30名ほどの学生がスチューデン

ト・インターンシップを行っている。再課程認定を経てスチューデント・インターンシップは教職課程の「大学が独自に開講する科目」として2020年度より全学部で開講することとなった。しかし、その年は新型コロナウイルス感染症により開講することができなかった。翌年、教育委員会との度重なる協議の上準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、前期は活動が保留となったが、後期からは各小・中学校の状況判断により9月又は10月から活動することができた。例年に比べ、4～5ヶ月という短い期間ではあるが、児童・生徒との関わりや先生方の授業の進め方や教員として役割などを体験するというインターンシップの目的を達成するだけでなく、ポストコロナの学校現場がどのような状況であるのか、小・中学校で行われているアクティブラーニングやICT教育に触れ、それを学生がどのように受け止めたかについて報告する。

## 2. スチューデント・インターンシップの実施について

2021年度のスチューデント・インターンシップの応募に関して例年のような事業スケジュール<sup>(2)</sup>で行えるように教育委員会と協議し、4月の段階でオリエンテーション、応募調書の作成が行われた。

小・中学校への配置については学生に事前にアンケートをとっている。大学への通学途中にある学校や大学に戻りやすい場所にある学校を希望することが多い。この年は表1に示すように7つの小学校と5つの中学校にほぼ学生の希望通りに配置された。活動は9月又は10月～翌年の1月で行った。表2に学部または学科別の平均回数と時間を示した。回数においてはどの学部もほぼ同じであったが、時間については学科又は学部間で違い

表1 スチューデント・インターンシップ受入れ校とその人数

	経済学部 経済学科	経営学部 マネジメント 総合学科	理学部 数学科	理学部 化学科	合計
坂戸小学校			2	1	3
大家小学校			2	3	5
城山小学校		1	3		4
浅羽野小学校			1	1	2
千代田小学校			4		4
南小学校	1	2			3
桜小学校			2		2
坂戸中学校	1	1	4		6
城山中学校			2	1	3
千代田中学校	1			3	4
浅羽野中学校			4	1	5
桜中学校			2		2
合計	3	4	26	10	43

表2 学部・学科別の活動回数及び時間について

	経済学部 経済学科	経営学部 マネジメント 総合学科	理学部 数学科	理学部 化学科
平均回数	10	10	12	11
平均時間	49	54	40	31

がみられた。化学科は必修の実験や理科の免許取得のための実験があるため、1回の活動時間が限られていることがうかがえる。また、経済や経営学部は回数の割に時間が多いことから1回の活動時間がある程度確保できるようになっているのではないと思われる。

### 3. スチューデント・インターンシップ活動を終えて

#### 3.1 日誌による活動報告

城西大学では初年度よりスチューデント・インターンシップでの活動内容を日誌に記載し、活動終了後提出させている。形式は教育実習日誌とはほぼ同じ形式であることから学生の日誌にコメントをしてくださる学校があり、その例をいくつか紹介する。

① 特別支援学級に配置された学生の日誌には、特別支援学級でどのような工夫がなされているのかがわかり勉強になったこと、学生本人は生徒の言葉が聞き取りにくく何度も聞き返してしまっただが、なるべく一人である子に話しかけたり手伝ったりしたことが書かれていた。それに対して「スチューデント・インターンシップ初日なので特別支援学級に入ってくださいました。様々な困難を持つ子供達に教師がどのようにサポートしているのかを覗いていただければ幸いです。見取った視点や思いが詳しく書けているので素晴らしいです。今はサポート役ですが、自分が担任だったら

どうする？という視点を持ち、取り組んでみてください。」というコメントをいただいた。

② 算数の授業に配置された学生の日誌には、小学3年生では各自での発表とそれについての討論を行っている授業、5年生ではタブレットを使って友達同士助け合いながら問題を解いている授業を体験したことが書かれていた。それに対して「現在の学校教育は子供達の“主体的・対話的で深い学び”を目的の一つとして取り組んでいます。従来の教師が児童生徒に対して一方的な知識や技能を与え、それを修得する方法はもはや過去のものとなります。なぜそれが変わらざるを得なかったのか？それは今後の将来の社会が何を目指しているかにかかっています。是非考えてみてください。」というコメントをいただいた。

③ 道徳の授業に配置された学生の日誌には、生徒が一人一人の考えを述べ話し合うという授業に参加して主体性の育成・向上が重要であることを感じたことが書かれていた。それに対して「道徳を2時間授業観察してもらいました。共通していることは児童が主体的に考えることができるよう発問を工夫していることだと学んでくれたようですね。道徳の授業で勘違いしてはいけないことは合意形成（折り合いをつける）をしてはならないことです。命に関わることを考えたりする道徳です。対立した考えの中から矛盾点を見つけ、道徳的価値等を深く探ることが道徳にはなくてはならないものです。」というコメントをいただいた。

このようにインターンシップ生に対して「どの授業に入ってもらった方が良いのか」「学びに対しての評価」「考えることへの問いかけ」など、様々な視点で個々の先生だけでなく、学校全体として、大学生を教育していただいていることが伝わってくる。また、ある学生は先生から「今度は先生になって現場で会いましょう。」と言われ、とても嬉しかった、と報告している。学生達は先生方からの言葉や声掛けにとっても励まされていると同時に教員を目指す上で何をしなければいけないかを考える機会を与えられていることがわかる。

### 3.2 発表会による活動報告

履修者全員で活動報告会を行っている。何を学んできたかなどについて5分程度で発表しており、それらの内容の一部を下記に示す。

- 1) ICT機器を使った授業を学ぶことができた。
- 2) 数学の授業でICT機器の操作に関する質問に正しく返答・説明が出来た。
- 3) 特別支援学級の生徒と関わる機会が多かった。そのようなときに、生徒の好きなことや興味のあることを把握しておくだけで、生徒から積極的に話しかけてくれるようになる事がわかった。
- 4) 特別支援教室での実習では教室にいる子どもたちとお話をしたり、遊んだり様々な交流ができた。やってはいけないことやどうしたら良いのかの伝え方、子どもたち同士の関わり方など子どもたちにどういった言葉や方法で教えていったら良いかについて学ぶことができた。
- 5) 特別支援教育は学校教育における原点である。難しい言葉で伝わらない時は易しい言葉で、言葉が伝わらない時は絵や動作として伝えることも必要になる。子どもたちの困り感を見極め、個に応じた指導を行い、社会に出たときに生きていくための力を養っていくことが必要であると感じた。
- 6) 特別支援学級の生徒に合わせたカリキュラムを生徒に合わせた速さで進め、より生徒理解が重要になることがわかった。
- 7) 道徳の授業において、まずどのような問題提起をするかが重要であり一方の事象を選んだらもう一方の事象がうまくいかないといったような答えを決めきれないような問題提起をする必要があります。小学校でここまで考えさせるのは難しいかもしれないけど考えるきっかけになりました。
- 8) 道徳の授業では、児童一人一人が自分の考えを他者に伝えることで表現し、対話を図っていくことが重要だと感じた。教師は児童の主体性を促し、発展させることが出来るような問いかけを行い、児童が他者を思いやる心や個性の尊重などの人と協働していく中で重要な役割を担う資質・能力を身に付け、適切な場面で効果的に発揮できるよう働きかける必要があると感じた。
- 9) 部活動の補助をしたときに、生徒に教える機会があった。そのようなときに、生徒それぞれのプレイの特徴をつかむことは的確な指導に繋がるということ学んだ。
- 10) 授業の中で、早くできる子どもと早くできない子がいるが、配慮を必要とする子どもに対して常に気配りをしていて、個に応じた指導を行っている。
- 11) 子どもの理解を深めるために工夫を行っている。具体的には、学習指導を行うだけでなく、日常生活での関わりの中で子どもの新たな一面を発見し、子どもとの信頼関係を築いている。
- 12) 生徒が学習しやすいような環境づくりを心掛けており、物事の一つ一つに気を配っていることがわかった。
- 13) 生徒同士で意見を交換し合う場を設けていた。いろいろな人の意見を聴くことで物事への見方・考え方が広がるので良いと思った。
- 14) 生徒が問題を解くときに、短い時間でもストップウォッチで時間を測るといったような、子ども

- を集中させるためにいろいろな工夫をしていた。
- 15) 教材作りのお手伝いをさせていただいてその大切さと大変さを学んだ。
- 16) 緊張して自分から話すことができなかったが、笑顔で話しかけると自然に話すことができ、一気にみんなと仲良くなった。
- 17) 自分が教えたことができるようになると嬉しい。
- 18) 外国人生徒に対して、翻訳機や身振り・手振りを踏まえて自分なりの指導が出来た。
- 19) 子どもへの学習補助を行う中で、自分にとっては当たり前のことであっても初めてその単元を学ぶ子どもにとっては当たり前でないということを実感した。子どもがつまずきやすいポイントはどこなのか、そしてどのようにすれば分かりやすくなるのかを常に考えていきたい。
- 20) 子どもたちが「一緒にいると心地よい」と思えるような接し方を心がける。具体的には簡潔に「今は〇〇をします」「△△ではなく、〇〇をします」のように、短く肯定的な言葉で語りかけることが伝わりやすかった。
- 21) 活発な学級では全員に対して質問をしているのに対し、おとなしい学級では一人一人に質問するように心がけた。

記述1～10では指導方法についてのコメントで、数学や理科などの教科に対する事より特別支援学級での教え方や道徳の時間に対することが多く寄せられた。記述11～15では教師の児童生徒への対応についてどのように工夫しているかコメントしている。また、記述16～21では学生自身が児童生徒とどのように関わることができたかについて、記述22～29では今後の自分自身へのコメントである。学校現場で学生一人一人が学んだことや考えたことを発表することによって、自分では経験できなかった事象や工夫、経験が共有され、さらには教育に対する他の人の考え方などに触れること

ができ、とても有意義な時間であったと思われる。しかし、限られた時間で行わなければならなかったことから話し合いの場を提供することができなかったため、今後は調整していきたい。

### 3.3 アンケートについて

表3に示すように、参加してとても良かった、良かったと回答した学生が95%で、ほとんどの学生が良い経験として受け止めている。また、教職にぜひ就きたい、就きたいと回答した学生が87%であり、先生になりたいという目的やモチベーションが強くなった学生がいる一方で、「どちらかといえば就きたくない」や「就きたくない」と回答した学生が13%いた。スチューデント・インターンシップを通して、良い経験であったが、自分には向いていないのではないかと考えた学生がいることを示している(表4)。

城西大学ではスチューデント・インターンシップは基本1年を通して行うことを推奨している。大学の時間割を考えると1回に行かれる時間が限られてしまうことから単位認定に見合った時間を確保してもらうために長期に行ってもらおうということもあるが、時間をこなせば短期でも良いとはしていない。年間を通して学校に携わることによ

表3 総合的に考えて参加して良かったと思いますか(%)

とても良かった	63
良かった	32
どちらとも言えない	5
良くなかった	0

表4 この事業に参加して、教職に就きたいと思いましたが。(%)

ぜひ就きたい	34
就きたい	53
どちらかといえば就きたくない	5
就きたくない	8

り、1年を通してでないとわからない学校の姿をきちんと観て、自分が生涯この場所に居たいか？を見極めてもらうためでもあるので「教職に就きたくない」と2年生で考えられたことは本人にとって今後の大学生活の方向を見極める良い経験であったと思われる。

今回のように新型コロナウイルス感染症に対して学校現場がどのように体制整備をし、運営しているかを学生が把握するためにスチューデント・インターンシップが役立てたことから、この事業の意義を強く感じられた。坂戸市教育委員会、坂戸市内の小学校、中学校の全教職員やご父兄の協力があったからこそ続いている事業であり、学生を育てる機会を与えていただいていることに感謝している。今後も継続してこの事業が続けられるよう努力をしていきたい。

#### 参考文献

- (1) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～の答申（中央教育審議会 平成27年12月21日）
- (2) 北川 浩子（2017）城西大学におけるスチューデント・インターンシップ事業への取組み、教職センター紀要 創刊号, p. 45-54.